

平成 12 年 9 月 20 日第 3 種郵便物認可(毎月 25 日発行)  
平成 15 年 8 月 31 日発行 O S K 増刊通巻 2 0 6 号

# O S K

## 岡山きびの会 「メッセ〜ジ・21」

0 3 年 8 月 号

	・ 家族グループの機能 ……………	2
目	・ 全国KHJ親の会を組織して ……	3
	・ 目立つ長期化、30 歳以上 1/3 ……	7
	・ 私の好きな言葉 ……………	8
次	・ 母親教室のご案内 ……………	8
	・ 7 月例会議事、グループまとめ……	別刷

### 9 月例会のご案内

日 時 9 月 20 日(土) 13 時~17 時  
場 所 岡山県総合福祉会館 8 階 大会議室  
岡山市石関町 2-1 (Tel:086-226-3501)  
講 演 全国 KHJ 親の会の現状・課題と展望  
講師 全国引きこもり KHJ 親の会・代表  
奥山雅久氏

### 1 0 月・1 1 月例会について

1 0 月例会 1 0 月 1 3 日(月・休)  
岡山国際交流センター (岡山駅西口)  
1 1 月例会 1 1 月 1 6 日(日)  
さんかく岡山 (岡山市表町 3-14-1)

## 《 家族グループの機能 》

### (ア) 希望をもたらす

「他者の成熟を見ることは、自らの成熟への大きな希望をもたらす」というグループ機能は、ひきこもりケースの家族グループにおける重要な援助要素の一つである。

たとえば、他の家族による、「うちの子がアルバイトに行き始めた」といった報告は、絶望感を感じてきた他の家族にも大きな希望を与える。

また、他の家族が本人との建設的な関係を取り戻して行く過程を目のあたりにすることにも大きな意義がある。

### (イ) 普遍性

「押しつぶされそうな孤独感を体験し、社会的に孤立した状態にある家族は、自分の問題が普遍的な問題であり、他のメンバーと分かち合えることに気づくと、大きな安堵感を得る」。

これまで実施してきたアンケートから、家族教室や親の会に参加した家族から聞かれる声で最も多いのは、「自分の家だけの問題ではないことがわかって、ホッとした」という感想である。

### (ウ) 情報伝達

治療者、援助者が、あるメンバーに提供した助言を他のメンバーも共有することができる。

また、参加メンバーが他のメンバーに助言するなど、グループ内での情報伝達が生じる。

筆者（近藤直司）らの実施している家族教室では、家族内に生じている「悪循環」と、その背景にある世代間境界の混乱や親の側の分離不安を中心的なテーマとして取り上げている。これらは、当事者には認識しにくいものであり、しばしば他の家族の発言から気づかされることもある。

### ④ 愛他主義

他者に何も提供できるものを持っていないと感じているメンバーにとって、互いにサポートし合ったり、他のメンバーに安心や洞察を提供したり、新たな方法を提案したりする行動は、その人の自尊心を高めたり、回復させることに役立つ。

抑うつ、絶望、怒りなどの情緒に圧倒されている家族にとって、自分の中に「力」を感じられることは、きわめて重要な体験となる。こうしたメカニズムは、家族が本人との間で新しい係わりを試みてみようと思えるようになる最大の原動力になるのかもしれない。

### ⑤ 社会的適応技術の発達

### ⑥ 模倣行動

グループへの参加は、他のメンバーの行動様式を取り入れる機会となる。子供との関わり方は、ひきこもる子供を抱える親たちにとってもっとも関心のあるテーマであり、他の家族で語られた家での様子や本人とのやりとりなどは、積極的に取り入れられる。

### ⑦ カタルシス

### ⑧ 早期家族関係の修正的反復

### ⑨ 実存的因子

ある種のグループでは、死、孤立、自由、空虚さなど、人間の存在における永久の葛藤が、避けることの出来ないものであることを学ぶ体験となる。

メンバーがこれらの体験を受け入れ、勇気を持って率直に対峙できるようになるにあたって、メンバー間の信頼関係や親密な出会いには、大きな価値がある。

### ⑩ グループの凝集性

ひきこもりケースの家族グループの凝集性が急速に高まる局面の1つは、「自分の育て方や関わり方が、子供を追い込んでしまった」といった自責感が語られるときではないかと思う。

こうした局面では、あるメンバーはそれに同意し、あるメンバーは彼らを慰めたり、「これから先のことを考えることにしよう」と激励するなど、メンバー同士の交流が活性化されることが多い。

(近藤直司編著『ひきこもりケースの家族援助』97頁より要点引用)

# 『全国引きこもり、KHJ親の会を組織して』

## — 親から見た「引きこもり」 —

全国引きこもりKHJ親の会・代表 奥山 雅久

### はじめに

慈しみ育んできた子供に暴言を吐かれ、時には暴力まで受ける——親として、人間として、心をえぐられるような気持ちと、少なからずトラウマを負ってしまう。

引きこもりを学習した現在では（私の場合、全国から寄せられる親や本人たちからの数千通の手紙やファクスを読んでいるので）、これは息子が対人不信、対人恐怖を抱え、なんとかしようとするほどアリ地獄に陥り、ついには己の人生が成立しない恐怖と、それゆえにこの世からひたすら消え去りたい辛さ、底知れぬ不安を、自分ひとりで背負いきれない思いが、物や壁、親に向かうことを知る。

### 親から見た「ひきこもり」

本人たちの多くは、親に「なぜあんな男と結婚した」「なぜあんな女と結婚した」「なぜ俺を生みやがった」という行き場のない鬱屈した塊をぶつけてくる。

当時、「息子は遅い反抗期なのだろう」と思っていた私は、こうした本人の心的メカニズムが解らず、息子の理不尽さが許せないという気持ちだった。その後、「引きこもり」という言葉を知ったときには、すでにわが家はその深みにはまっており、「家族機能不全」「家庭崩壊」「一家離散」へと向かっていったのである。

引きこもりの本人は、永年に亘って対人関係を結べず、孤立した状況の下、ついに社会参加の機会を失っていくばかりでなく、対人関係の原体験の喪失で、「一人称のみの世界」に陥ってしまう。

そして自己否定の極致と誇大妄想の狭間で、対人不信、対人恐怖も重なり、強迫性神経症、妄想念慮、人格障害、摂食障害的傾向を惹起していく例が多い。いわゆる「二次障害」への移行である。

しかし、知能面ではハッキリしている本人は「何とかしたい」「一気に挽回したい」との焦りからか、さらなる深みに陥る。まさに蟻地獄の構図である。このような病理性と焦り、そして絶望感は、自己の未来を閉ざして過去の念慮に縛られていくのだ。

「あの時、何々をしてくれなかった」から始まり、その矛先は、主に親へと向かう。この世に完璧な親などいないにもかかわらず、親は親で、思い当たる節がないこともない。特に、母親は「私の子育てがいけなかった」と本人の言いなりになって、引きこもり本人の召使いとなりやすい。これが「母子共依存」の始まりである。

つまり、よほどのことがない限り、この共依存は解けず、従って本人の自立した人生と未来は、永遠にやってこないのである。

さらに「親亡き後、この子はどうなるのだろうか」との究極の心配と、世間体の悪さが縛りとなり、子供の長い引きこもりの間に、親は親でカウンセリングや薬が必要となるような状況に陥っていく。

こうした深刻な「我が家」の問題に、当然といおうか、父親と母親が一致協力してあたることができるのだろうか。現実には、残念ながら父親と母親の考え方の違いが明確になりやすく、「夫婦不仲」「別居」「離婚」とさらなるおまけがつく傾向がある。

こうして父・母・本人の「三つどもえの戦い」があるいは母子共依存などで、機能不全に陥っている家庭が日本に百万軒以上もあるのである。これらは、さらに「一家離散」「家庭崩壊」「家庭内事件」へとつながっていく。

引きこもりの発生原因は、学校でのいじめ、友人に裏切られた、受験に失敗、身内の死、夫婦不仲、何となく、などさまざまである。しかし、それにしてもガラスのように壊れやすい現代っ子。親として、その発生源にどうしても、今一つ理解できないところがある。

引きこもり本人の「リゲイン」に関して、最も身近な親の関わりが不可欠なことは確かだが、しかし上記のように、実際には、その親自身が引きこもりに巻き込まれ、家族が機能不全に陥り、先の見えないエンドレスの親子になって、問題を内在化し、深め孤立していくのである。

このように、引きこもり家庭が孤立していくメカニズムこそ、引きこもり問題の長期化と深刻さを助長する重要なファクターの一つと考え、それが親の会の設立の大きな動機となった。

## 全国規模の当事者組織設立へ

引きこもりを抱える家庭が、本人との日々のあつれきや世間体の悪さなどから、その事実を世間から隠し、内在化してしまうことが、引きこもりの魔のメカニズムの餌食となり、引きこもりの深刻化、拡大化が促される。

そこで、当該家庭の親が共に手を結び、支え合い励まし合える場が必要となった。

三年半前、埼玉県には10人前後の「親の会」が3団体ほどあった。その中の一つの会は、10年を越えて細々と親の会を継続していたが、会のメンバーは全員が母親のみであった。

私が「10年間で何か変わりましたか」と聞くと、「何も変わりません。本人たちが30代半ばになっただけです。でも会のおかげで、親が自殺したいという衝動からは逃れることができました」とのこと。さらに私は、「どこかの機関が支援してくれていますか」と問うと、「支援はほとんどなく、私たちだけで慰めあっています」との答えである。

そこで私は、近隣の地区の中央保健所に支援を要請に伺ったところ、引きこもりの件は、保健所では基本的に対象外です。上(旧厚生省)からの通達でもあれば別ですが、そのためには引きこもりの全国組織がなければね」というアドバイスであった。

以来、県単位の設立セミナーをほぼ毎月開催し、これを組織化する一方、親の会で引きこもりの実態調査アンケートを実施し、それをデータ化して、埼玉県、旧厚生省、国会議員に提出した。

これにより、後の厚労省から「社会的引きこもりへの対応ガイドライン(暫定版)」が全都道府県に通知され、2002年11月15日の国会「引きこもり対策議員連盟」発足へとつながることとなったのである。

## 「全国引きこもりKHJ親の会」の活動紹介

現在、「全国ひきこもりKHJ親の会」(親の会連合会)では、県単位の月例会など33支部にて毎月開催し、その地域の専門家、自治体、支援者、議員などのサポートも少しずついただき始めている。以下、月例会の具体的内容を紹介したい。

### (1) 親のメンタルケア

- ① ガイダンスにて、引きこもりの実態とメカニズムの勉強
- ② 「サークル会」(10人位ずつに分かれて車座になる)で、たまっている鬱を吐き出すと同時に、他の例や先例を聞く(辛さ《鬱》を溜め過ぎると、親も神経症に陥り、本人と悪循環

になる)。特に、引きこもり経験者の体験談は、親たちに本人の心情を理解する参考となり、希望を与えている。

- ③ 引きこもり本人は約8割が男性のため、父親との確執が激しくなりやすい。父親が、自分の人生観を子に刷り込むことをやめ、本人の心情を理解することで本人が浮上してくるケースがある。(親の会への父親の参加率が約20%)
- ④ 親の世代にとっての時代観として「食べさせ、学校へ行かせる」ことが愛情と考えるが、生まれてきた時にすべて不自由のなかった子にとって、親が「食べさせ、学校へ行かせる」ことは当たり前の、すでに折り込み済みの話であり、子が親に求めている精神的な愛情とのずれ違いが起こっている。
- ⑤ 世間体を脇に追いやり、「これも人生」と腹をくくる覚悟を皆で一緒にする。(1歩ずつ、ベストではなく、ベターを目指す)

## (2) 親の会の役割と効果

- ① 月例会にたくさんの家族が集まり、苦しいのは自分ところだけでないと実感
- ② 似た状況のなか、共感できる仲間・安心して心のうちを吐露し合える仲間との付き合い、励まし合い、支え合うなかで感じる安心感、癒し
- ③ 支援者のサポート
- ④ 仲間皆と一緒になら、辛い状況でも腹をくくっていけるかも(知識と覚悟との違い)
- ⑤ 訪問サポーター、思春期対応の精神科医、カウンセラー、臨床心理士、ケースワーカーなどの紹介
- ⑥ 全国の仲間と手を結びつながっている実感
- ⑦ 若者の居場所、グループホームの紹介
- ⑧ 芋煮会、クリスマス会、ハイキング、施設見学会
- ⑨ 医療情報などの交換
- ⑩ 会報の発行
- ⑪ 自治体にアンケートを提出、要望していく。
- ⑫ 引きこもりの実態のアンケート
- ⑬ 専門家による相談会
- ⑭ 家族教室
- ⑮ 若者の居場所へのサポート、参加、構築、運営

## (3) 会本部の役割

- ① 機関紙「旅立ち」の発刊
- ② ホームページの更新
- ③ 全国支部設立と既存支部へのサポート
- ④ 国会議員連盟への要望
- ⑤ 厚生労働省への要望
- ⑥ 全国ネットでのアンケート実施(毎年)
- ⑦ 他団体との連携
- ⑧ 引きこもり者に理解ある職域の開発
- ⑨ 引きこもり第1原因(身体的症状)の究明、検証、対策、要望
- ⑩ 引きこもり者向けのパソコンソフトの開発

- ⑪ 訪問サポート士育成講座用教本の作成、問いかけ
- ⑫ 自助グループのリスト化とホームページでの紹介
- ⑬ 講演活動
- ⑭ マスメディアへの対応（社会的理解、共感、支援を得るため）
- ⑮ 伝統仏教（高野山真言宗・比叡山延暦寺など）の家族向け施行行事
- ⑯ 世間体を排しつつ、日本人が己の感じるままに自由な心で生きられる人生観の訴え
- ⑰ 多様な価値観、懐の深い、『敗者復活戦』が何度でもある社会づくり、生きにくさを抱えるひきこもり者、タテ型組織社会がダメな数百万人に及ぶフリーターの若者でも、この世に生きていける社会への訴え
- ⑱ 社会的理念（物質文明に操られない）、精神性の回帰の訴え

## 公的対策の現状と問題点

この2年間で、国レベルでは、厚生労働省から『社会的引きこもりに対する対応ガイドライン』が出され、国会では「引きこもり対策議員連盟」が結成された一方、自治体レベルにおいても、埼玉県「引きこもり庁内連絡会議」をはじめとして、各地の自治体も少しずつ動き始めている。

仙台市、郡山市、山形県、埼玉県、岡山県、神戸市など、とりわけ山形県と岡山県では、昨年4月より「引きこもり家族への訪問サポート事業」を実験的に試みているとのことである。

しかし、引きこもりは「百人百様」、ましてや人間様の心の問題でもある。右から左にすぐどうこうできる案件でもなく、引きこもりは果たして状態なのか、病理なのか、病気なのかすら、定まっていない現状である。（当会では神経症と考えている）

しかし、その多くは不登校（中学校以降の思春期）から始まり、それが大人に移行して蓄積している現況、しかも日本のみならず顕著に発生している点では、「縦型組織社会」「世間体」「強い拜金主義」「効率一辺倒な組織社会」「権利だけの民主主義」「パブリックという理念なき国家」「戦後社会の歪み」など、社会的病理ともいえよう。

わが国のみならず進行、蓄積してしまっている無数の若者たちの引きこもり——本来、次世代を担う大切な存在である。すでに30代だけでも30万人（構成比28%）ともいわれ、社会問題であるのならば、省庁間を超えたプロジェクトが必要である。健康・労働問題としては、厚労省に総合対策が打てる「引きこもり対策課」の新設を切望したい。

また、100万人以上という数字は、単に偶然発生したとは考えにくい。引きこもりが思春期以降に多発している現況下、ダイオキシン、合成黄体ホルモン説などを唱える専門家もおり、当局にはぜひその検証をお願いしたい。

一方、行政、自治体に対しては、親のメンタルヘルスケアを通して、当該家族の悪循環を阻止し、浮上させるため、専門家や中間施設につなぐ親の会（家族会）への助成や、中間施設（若者居場所、グループホーム）の構築、運営補助、カウンセラー費用への補助、全国各地での訪問サポート士派遣協会の設立と、講座の開設などを要望したい。

さらに、危険で重度の引きこもり本人とその家族には、シェルター、移送制度、精神保健センター、警察などの「責任ある連携」が切望される。

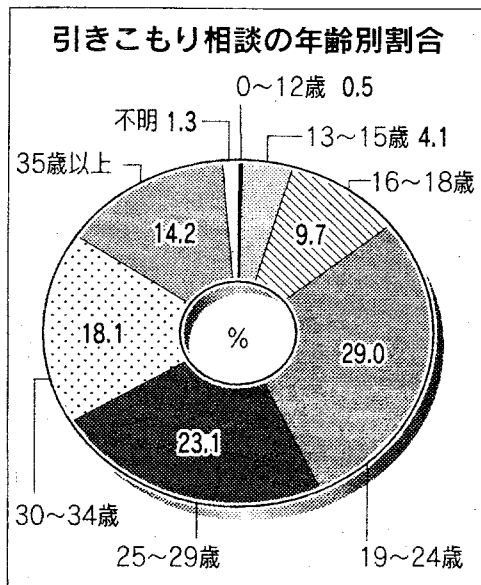
この資料は、奥山代表が大阪保険医雑誌(2003年2月号)へ寄稿され『旅立ち』No.13・14号に掲載された記事を転載したものです。

# 引きこもり、深刻に

社会との接点を持たず、長期間にわたって自宅に閉じこもる「引きこもり」問題で、昨年一年間に全国の保健所や精神保健福祉センターに相談のあったケースの三人に一人は三十歳以上だったことが二十八日、厚生労働省の実態調査で分かった。十年以上引きこもっている人も四分の一と長期化している。行政のサポートも中断するケースが多く、対応の難しさも露呈した。

## 30歳以上1/3 目立つ長期化

厚労省調査



調査は今年三月、全国の精神保健福祉センター(六十一カ所)と保健所(五百八十二カ所)を対象に昨年一年間の相談状況を尋ねた。電話相談の延べ件数は九千九百八十六件、来所相談件数は四千八十三人に上った。来所したうち三千二百九十三件を詳細に分析した結果、男性が七六・四

## 行政支援に限界

%と引きこもりの四人に一人は三十歳以上だったことが分かった。相談時の年齢は十九〜二十四歳が二九・〇%と最も多かったが、三十歳以上が三二・三%と約三分の一を占めた。特に三十五歳以上が全体の二〇・二%と、壮年化が顕著だった。同省研究班が約三年前の二〇〇〇年十一月に実施した全国調査では三十一歳以上は一八・八%。三十歳以上で引きこもり問題が解決していないだけなく、二十代で引きこもっていた人がそのまま三十代に突入している様子が見え始めた。さらに「援助終了」(一引きこもりのうち不登校経験者は六一・四%に含まれる「改善は特に見られないまま終了」)を〇%で、次いで中学校の三一・六%と中高の不登校がきっかけになっていない。また、約三分の一は一年未満で二四・九%だったが、次いで十年以上が二三・一%と長期化が目立った。家庭内での暴力も一九・八%で、親への暴力が大半を占めた。こうした相談を受けたケースのうち、五六・九%は「援助継続中」だったが、最後までサポートできなかった「中断・音信不通」は二四・一%に上った。

## 私の好きな言葉

行動が変われば、心は変わる  
心が変われば、態度が変わる  
態度が変われば、習慣が変わる  
習慣が変われば、生き方が変わる  
生き方が変われば、人生は変わる

私が変われば、周りが変わる  
私が変われば、相手が変わる  
私が変われば、今日が変わる  
私が変われば、私の人生が変わる

自分が動かなければ、人も動かないかもしれない、

自分が動けば、人も動くかもしれない。

いや、人が動くチャンスは必ず高まるだろう。

自分が変われば今日が変わる、今日が変われば、明日が変わる、

そうしていくうちに人生を変えることができますと思いますが皆さんは・・・

(花谷)

### 第4回 母親教室のご案内

日時 8月28日(木) 13:30~16:00  
場所 出石小学校 3階 きびの会  
指導 西 紀子 さん(本会パートナー)

岡山きびの会 連絡電話

0868-23-3294 川島(会長・津山)

086-424-7162 織井(事務局・倉敷)

710-0815 倉敷市日吉町 517-4

070-5306-9539 花谷(出石小,土曜 10~12時のみ)

平成12年9月20日第3種郵便物認可(毎月25日発行) 平成15年8月31日発行 OSK増刊通巻206号

発行所 岡山障害者団体定期刊行物協会 702-8025 岡山市浦安西町74-9 (TEL.086-263-7537)

(定価1部100円 は会費に含まれます)